

行政区域再編状況と人口推移に見る奥出雲町の地域特性

島根県仁多郡奥出雲町の事例研究 その1

たたら製鉄
中山間地域

行政区域再編

- 準会員 ○小野 浩一*
- 正会員 中園 真人**
- 正会員 牛島 朗***
- 正会員 三島 幸子***
- 正会員 今富 良介****

1 研究目的と背景

本研究は、島根県仁多郡奥出雲町を対象として中山間自治体における行政区域再編と公共施設配置との関連を歴史的経緯を踏まえ明らかにする事を目的とする。中国地方の中山間地域では、古来よりたたら製鉄業が発展し、独自の産業構造のもとで地域社会が形成されてきた。特に奥出雲町は、かつての和鉄生産主要地域であり、たたら製鉄が衰退した後も、かつての産業構造が地域空間の変容に影響をもたらしてきた事が考えられる。そこで、本編では現在の奥出雲町に至る経緯を過去の産業を通して行政区域変遷・人口推移を説明し、地域特性を探っていく。

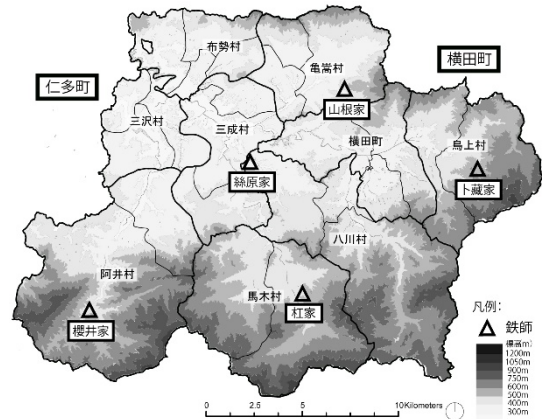


図1 松江藩9鉄師分布^{注1) 2)}

表1 奥出雲町域鉄師経営たたら場数・大鍛冶屋と産鉄量(駄)の変遷^{注3)}

鉄師名	たたら場・大鍛冶屋数	1823年(文政6年)	1826年(文政9年)	1855年(安政2年)	1861年(文久元年)	1872年(明治5年)
糸原家(大谷村)	たたら場数	1	1	1	1	1
	大鍛冶屋数	3	3	3	3	2
	産鉄量	4656.00	4212.00	4916.11	4505.00	3288.20
櫻井家(上阿井村)	たたら場数	1	1	1	1+α	2
	大鍛冶屋数	2	2	3	3	3
	産鉄量	6955.50	6104.00	6545.21	6119.04	5798.81
ト藏家(竹崎村)	たたら場数	1	1	1	1	1
	大鍛冶屋数	1	1	2	2	2
	産鉄量	4356.00	3844.00	4558.85	4485.60	2901.10
市郎右衛門(亀嵩村)	たたら場数	1	1	1	1	1
	大鍛冶屋数	1	1	2	2	3
	産鉄量	3450.000	3304.000	2509.800	3028.600	1777.160
石原家(亀嵩村)	たたら場数	1	1	1	1	1
	大鍛冶屋数	1	1	2	2	2
	産鉄量	2440.00	3056.00	3635.30	4402.38	1485.80

* αについて出展資料に記載はないが、広瀬藩飯石郡・仁多郡においてたたら場があることを示している

4)、鉄価が下がる。鉄価が上がるのが明治5年あたり⁴⁾で、表1では1872年(明治5年)時は1861年(文久元年)に比べ、どの鉄師も減少している。しかし、櫻井家の減少率は非常に小さい。たたら産業の人口から発展を見たいが、それぞれの人口を知る情報がないため、糸原家の事例から推測する。鉄師糸原家の1875年(明治5年)の記録によると、たたら1か所・大鍛冶屋2か所・砂鉄採取場13か所

2 たたら製鉄の与える雇用

松江藩は1726年(享保11年)に「鉄方御方式」を定め、鉄師・たたら・大鍛冶屋の数を限定し、先納銀制^{注2)}を課す一方、鉄山用山林を貸し与えるなどの保護政策を行った。³⁾その後たたら・大鍛冶屋数の制限なども薄れ、増設が行われた。表1は1823年(文政6年)から1872年(明治5年)の奥出雲の鉄師が経営したたたら場・大鍛冶屋数と産鉄量の変遷を示している。たたらは1861年(文久元年)からの櫻井家以外はどの鉄師も1つしか持っていない。大鍛冶屋は糸原家・櫻井家がどの年度も2つ以上あり、そのほかの鉄師は1823年時1つのみで、1つから2つ、または3つに増えている。産鉄量は櫻井家が最も多く、糸原家・ト藏家がほぼ同等である。市郎右衛門・石原家は変動が多い。明治直前は幕藩体制の財政の行き詰まりもあり、金融が困窮していく時期であり

Reginal characteristic of Nichinan Town as seen in administrative division reorganization and population transition- Case Study of Okuizumo Town, Nita Gun, Shimane Prefecture vol.3 -

ONO Kohichi, NAKAZONO Masato,
, USHIJIMA Akira, MISHIMA Sachiko
, IMATOMI Ryosuke

にて、付属施設の番頭・手代 20 数人、支配人ほか専任事務員 5 人、村下^{註4)}・直接作業員 393 人、木炭製造・砂鉄採取等関連作業員 530 人、原材料・製品運搬 262 人。以上小作を含め 1200 人余りが従事し、家族を含めると 5000 人から 6000 人が 1 か所のたたら操業に関連し、生活していた。⁵⁾ 明治 8 年の記録であるため、産鉄量を考えると鉄価下落前の 1861 年の記録に近い数値と推測し、4500 駄で家族含め、5000 人とする。そうして考えると、櫻井家で約 6800 人、卜藏家で 5000 人となり、表 1 に載っている鉄師だけで約 2 万 5 千人がたたら製鉄関連の人口となり、推計ではあるもののたたら製鉄によって支えられた人口が非常に多かったことがわかる。

3 たたら製鉄後の奥出雲町の動向

島根県は明治 11 年に農次試験係を設け、製鉄業の不振の中で、農業への展開を図り、糸原権造にその任を委ねた。糸原武太郎は明治 16 年に牛の改良を行い、明治 39 年には三成と横田に種牛所が設置され、優秀な成績を上げた。奥出雲町は和牛の産地として名声を馳せた。¹⁾ 三成村に 1900 年(明治 33 年)に創業した桜井製糸場は 1917 年(大正 6 年)には従業員 280 人の大工場となったが 1922 年(大正 11 年)に郡是製糸に買収されている(1941 年[昭和 16 年]廃業)。¹⁾ 製鉄業は、日露戦争の勃発により一時的に好景気を迎えるも長続きせず、これから林野の活用は、新たに市場炭へ活路を求め、大正 4 年には、仁多郡林業会が設立された。¹⁾ 奥出雲の鉄師が大山林所有者であるのは廃藩により、「鉄方御方式」の際に与えられた鉄山用山林が各鉄師にそのまま分配されたことはその後の山林を扱った産業の拡大の助力となった。大正末年に製鉄業を完全に廃止した糸原家ではこれまで召し抱えていた労働者の失業対策に、所有山林の経営に対処するため、先進製炭技術者を招致し指導を受けた。関東において直営販売所を設け、有力問屋と取引を行った。¹⁾ 糸原武太郎は、新たな交通(輸送)対策として木次線の開通を目指し、自ら社長となり簸川鉄道会社を 1913 年(大正 3 年)に設立した。昭和に官営に移管され、

昭和 12 年に全線開通した。¹⁾ 幕末に芽生えた算盤は、大正期に入る「雲州そろばん」の名称で名声を博した。その後、就労者が増え続け、昭和 30 年代～40 年代の高度経済成長には、農業を除く基幹産業にまで発展した。昭和 50 年代後半にかけて漸次衰退していき、雇用を取り戻すために当時行われた企業誘致が、現在のおもな就労の場となっている。¹⁾ 横田地域では基幹産業である農業の振興施策とし、畑地が整備され、蕎麦を中心とした生産を奨励し、多くの蕎麦屋が店を構えた。¹⁾ また、鉄穴流しでできた棚田・農地を用いて作られた仁多米なども名産となっている。

たたら製鉄後の奥出雲町は明治期に和牛の生産、製炭業への切り替え、昭和期には算盤の生産で有名になるなど、基幹産業の農業以外に支えとなる産業があった。鉄穴流しで作られた棚田の土壌がより、お米の品質を向上させるなど、産業の転換だけでなく、たたら製鉄の遺産を用いて、元からある基幹産業を成長させた。¹⁾

4 行政区域変遷

明治初年に 63 町村あったが、明治 8 年の合併で 28 町村となった。明治 21 年に市制町制が施工され、明治 22 年の大規模合併で 9 村、昭和の町村合併促進法・新市町村建設促進法施行後、昭和 30 年に仁多町が発足、昭和 32 年に斐上村(昭和 33 年に改称し横田町)が発足し、2 町になった。平成まで 2 町を継続し、1995 年の合併特例法が施工されてから、10 年後の 2005 年(平成 17 年)に奥出雲町となった。

表 1 に明治初年から 2005 年の合併までの変遷を示す。松江藩 9 鉄師の拠点となった地区は、亀嵩村を除き、明治 22 年の合併規模が小さい。明治初年から 2 つから 3 つの村の合併であったが、松江藩 9 鉄師のいなかった三成村は 15 町村、三沢村は 11 町村、横田町は 10 村が明治 22 年時に合併している。これは鉄師の築いた基盤が合併せず生活していけるほど強かったことと、山間部で居住地が狭いことの二つが原因ではないだろうか。昭和 30 年・32 年の合併は図 2 で行政区域と標高を合わせて見ると、仁多町は平坦な地域、横田町は傾斜が大きい山間の地域であることがわかる。昭和にはたたら製鉄を廃業

している鉄師がほとんどで、算盤産業・農林業・畜産などが主な収益となっている。横田町では昭和の合併以前から次第に旧横田町が拠点としての重要性が増してきていたと思われる。一方、仁多町は阿井村が櫻井家の本拠であったため、産業において中心であったが、櫻井家の廃業後はその他の地区が開けた平坦な地区であるため、合併がスムーズに進んだ。仁多・横田町の合併は地形的な隔たりがありながらも、実行された。

5 奥出雲町の人口

図3・4の段階分けは「たたら製鉄による中国山地の開発に関する歴史地理学研究」を元に作成した江戸時代の3つの時期と明治・大正期に稼働したたたら分布の合計数で行った。

明治22年には横田町が9433人、仁多町が11170人で全体として高い位置に属する。図4では昭和35年時の人口を示しているが、仁多町は6947人、横田町は5433人となっている。明治22年のたたら製鉄が陰り始める時期ではあるが、山間農業地域内でも、高人口の町村は確認できる。平成27年のグラフを見るとたたら以外の町村の人口の減少が見られ、仁多町・横田町の位置が上昇している。人口は減少しているが減少率が低い。これらの要因は3節でみたように、たたら製鉄廃業後に新たな雇用を生み出したことが大きい。

図5では奥出雲町全体の人口を見ることができ、1889年(明治22年)時に20603人でそれからほぼ横ばいで増加していく。1918年(大正7年)はたたら製鉄の衰退期で、一度減少するが、その後は増加を続け、最も人口が多くなった1955年(昭和30年)には28477人まで増加した。1955年をピークに減少を続けていき、2015年(平成27年)には13063人まで減少した。図6を見ると各村の人口はどの村も同じような軌道で増減し、三沢・鳥上村は人口が低い、ほかの村の人口規模は近い。規模の大きい村が旧横田・三成村で両村、仁多町・横田町の中心地である。高度経済成長での人口流出による人口減少が見られ阿井・八川・馬木村の減少は大きい、全体として、その速度はなだらかな傾向にある。戦後の第一次ベビーブーム時に増加している町村が多いが、減少

表2 行政区域変遷

~1868 ~M1	1875 M8	1889.4.1 M22	1941 S16	1955 S30	1957 S32	1958 S33	2005 H17
三成町	三成町						
下三成村 矢谷村 広瀬村 湯野原村 神畑村 上三成村	三成村		三成町				
里田村 石原村 角木村 乙多田	三所村						
下三所村 高尾村 小白村 久月村	高尾村						
上阿井村 下阿井村	上阿井村 下阿井村	阿井村					
西湯野村 梅木原村 久比須村 中湯野村	亀嵩村	△					
亀嵩町	亀嵩町		仁多町				
郡村 藤村 高栗村 大内原村 塩原村 高田村	郡村						
琴枕村 三沢町	高田村						
鞍掛村 原田村 堅田村	三沢村						
林原村 河内村 四日市町 大吉村 乙社村	河内村						
下鴨倉村 上鴨倉村	鴨倉村						
佐白村 上布施村 前布施村	佐白村						
八代村 馬馳村 上三所村	八代村 馬馳村 上三所村						
横田村 加食村 大曲村 角村 中村 馬境村 樋口村 五反田村 蔵屋村 原口村	横田村 中村 種原村		横田町			斐上町 横田町	
大馬木村 福田村 小馬木村 大呂村 竹崎村	大馬木村 小馬木村 大呂村 竹崎村	△	馬木村				
下横田村 大谷村 八川村	下横田村 大谷村 八川村	△	八川村				
63	28		9		5	2	1

*△の印は松江藩9鉄師の本拠

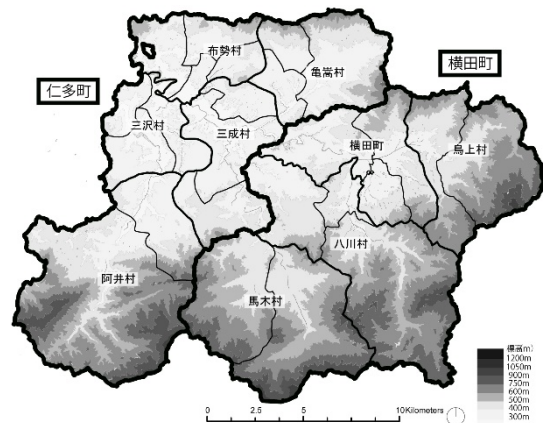


図2 行政区域変遷マップ

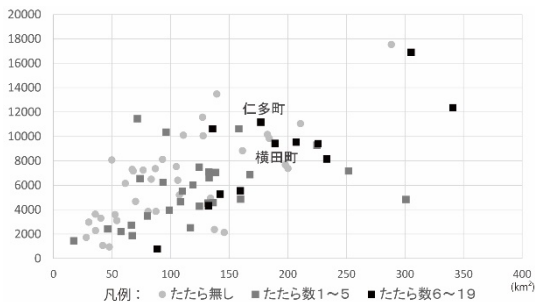


図3 中国地方山間農業地域における昭和35年時行政区分明治22年時人口とたたら数

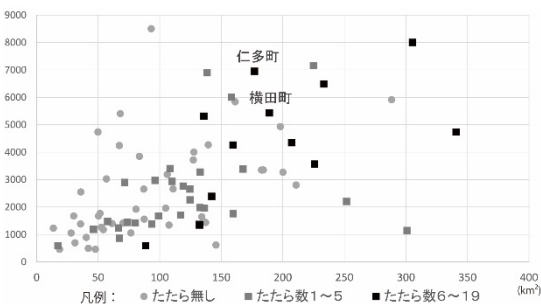


図4 中国地方山間農業地域における昭和35年時行政区分平成27年時人口とたたら数^{注5)}

*1 山間農業地域は昭和25年行政区分の山間農業地域分類された自治体数が昭和35年行政区分中の70%以上であること、かつ、山間農業地域のみ・山間農業地域と中山間地域で構成された町村を示す

*2 市は除く

している村は三沢村・三成村である。3年後には三成村は人口が回復している。

以上の人口動態を見ていくと、全体として減少傾向であるが人口減少は傾向として小さく中心地以外の村でも人口が横ばいとなる年も見られ、中心地以外の村で今後も人口を留まる可能性も考えられる。

6 まとめ

1) 奥出雲町内のたたら製鉄従事者の占める割合が高く、その後の産業も鉄師が主導で進め、新たな産業を生んだ。鉄穴流し後の棚田でお米を生産するなど、たたら製鉄に受けた恩恵が大きい。

2) 仁多地区の平坦な地形で居住地も広く確保でき行き来も容易であること、横田地区では山

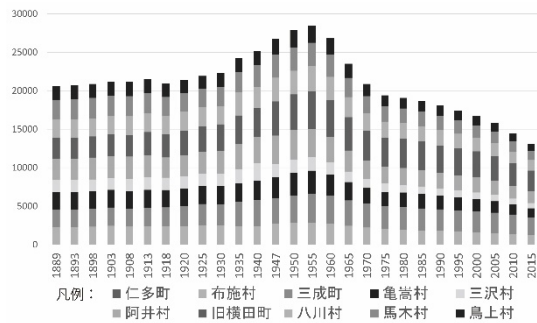


図5 奥出雲町人口推移 1889年～2015年

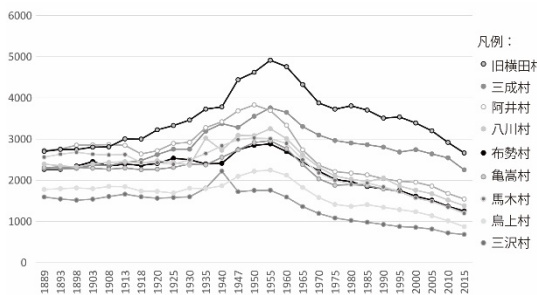


図6 奥出雲町各村別人口推移 1889～2015年

間部が多いが旧横田村を中心に発展してきたこと、それぞれに地形的な恩恵もあり、現在の1万人以上の人口を抱える町となったと考えられる。

注釈

- 1) 他4鉄師は現雲南市に3家、出雲市1家存在した
- 2) 先納銀制とは、米を年貢として納める代わりに銀を納め、藩から米を貰い、糧米とする制度
- 3) 参考文献1)の表5-4-21,5-4-22を参考に作成
- 4) 村下とは、たたら製鉄の技師長のこと
- 5) 図3・4におけるたたら数は寛政3年・文化4年「勸進帳」、角田(2012)、『工場通覧』明治37・40・42年・大正8・9年分などより作成した

参考文献

- 1) 奥出雲町文化的景観調査報告書 p14～15, 115～122,
- 2) たたらと刀剣館資料 奥出雲の製鉄史と鉄師
- 3) 絲原記念館資料 鉄方御方式
- 4) 日野町史 p690
- 5) 絲原記念館資料 地域システムとして営まれた“たたら製鉄”

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

**山口大学大学院創成科学研究科 教授 工博

***山口大学大学院創成科学研究科 助教 博士(工学)

****山口大学大学院創成科学研究科 大学院生

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

*** Assistant Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr.

Eng

**** Student, Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ